

繪本拾遺信長記

前篇

三

特別

13

2507

3



門 遠
號 2507
卷 29-3

繪本拾遺信長記卷之三

目錄

本願寺評定之事

金園が寺拾松

石山より鈴本重幸とある

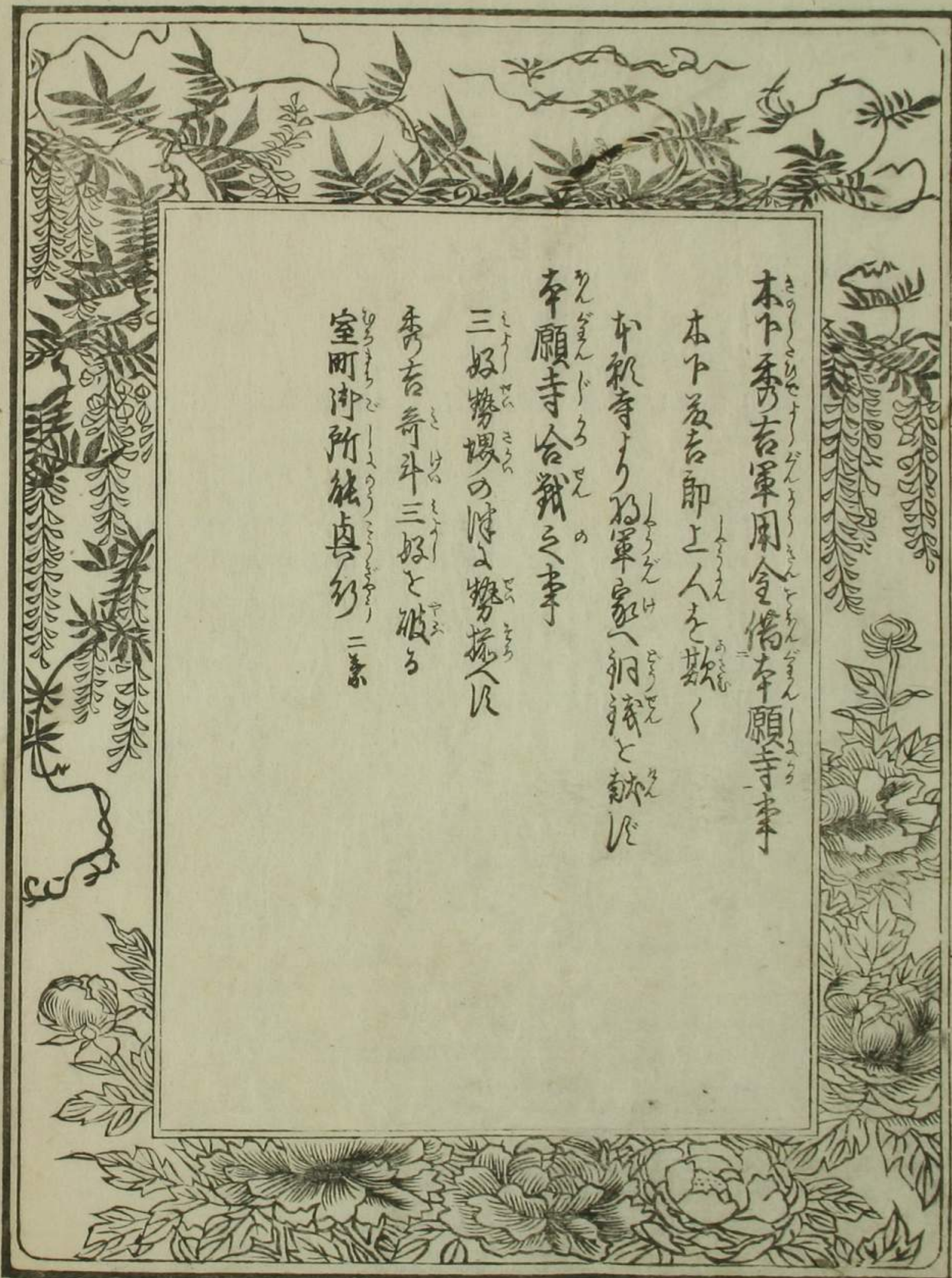
本願寺評定

信長攝河兩國平均之事

池田勝政信長と我山

小田勢を龍寺乃城とある

繪本拾遺信長記



本下秀吉軍用金備本願寺事

本下秀吉即上人を欺く

本願寺より軍家へ御義と欺け

本願寺合戦之事

三好勢場の時之勢振入

秀吉奇斗三好と破る

室町所依貞形 二条

繪本拾遺信長記初篇卷之三

本願寺評定之事

紀伊國海部郡と有田郡の境に及白山といふ所あり向之の勢

しくも藤原の味方なりとす及白山と号するやけ不双の

風系ありて秋人強客の心といたましむ昔時大納言巨勢の

全園といふ名画の人ありけ不の風を結系を撰写せんとい

たまふ度等瓜房しぬまふ志の風系乃ぬるふ他瓜房

捨く字尻を止むといふ他人に今も全園が筆捨松と被

不れありといふ續後撰集抄意法師のふ

及白の津坂を越く足渡せば霞も中ぬ吹上り候

けしの林藤と鈴本原右衛門尉守孝といふ者あり其る祖の源





松捨籠
全圖



延尉義経の功臣鈴木三郎重家廿二代乃後胤鈴木重可
 倫が婿男なり天性智勇王佐の英才ありて胸中ニ孫兵衛
 術と稱ゆり子房孔明が謀略の才にまじりて若冠の討より
 なる名家まを執りてては後白山の幽居に雪月花と耽んで
 山々の清書と寸じ一向世々の炊きとてく余り佛道の
 淵理あり小心をこめ先祖より密師の門系に連まれば毎
 二石に清上人は獨しく佛の令言とよるこびるのまきとを論
 じ如上人も専らまきとを理義明らるる孤孫に孫の一方
 をくひりては孫まきにけ度急候をひてまきとを拓き孫まきより
 何り申さんと菴とまきと石にまきと席に連りて其勤静とを視
 ふよ本報寺の坊官家老用人と首に近國近在の門徒亦まきと

の佛道秘法集り春門にじり小廣き御堂に居余り藤とかと
 孫とまきと何りの議論中を息と浩て並居りけ時上人内陣み
 出させ孫の信長が口上の執きと審り物渡りあ眼に御清と孫
 孫の何と返言せば可なりんや我父の其まきとを言ふと希人
 けお小門下の衆中と拓きまきと衆議のよん返言せんまきと今
 日の會合に及ひり人々の心を度まきととあたる一層の人々
 門徒の面くまきと執と見合せく憎く河もわさうたり時山回三
 郎もまきと侍とまきと出くや多り某不肖より人々も不存とせ
 とまきと衆議よりいぬ衆議とやんまきと信長元来野曲不信のま
 きとよして今度足利義昭とまきと拵とまきと孫まきと人と退退候ま
 きと嵩宗門と破却せんまきと乃下心とまきと見へ抑嵩寺の聖徳をまきと乃

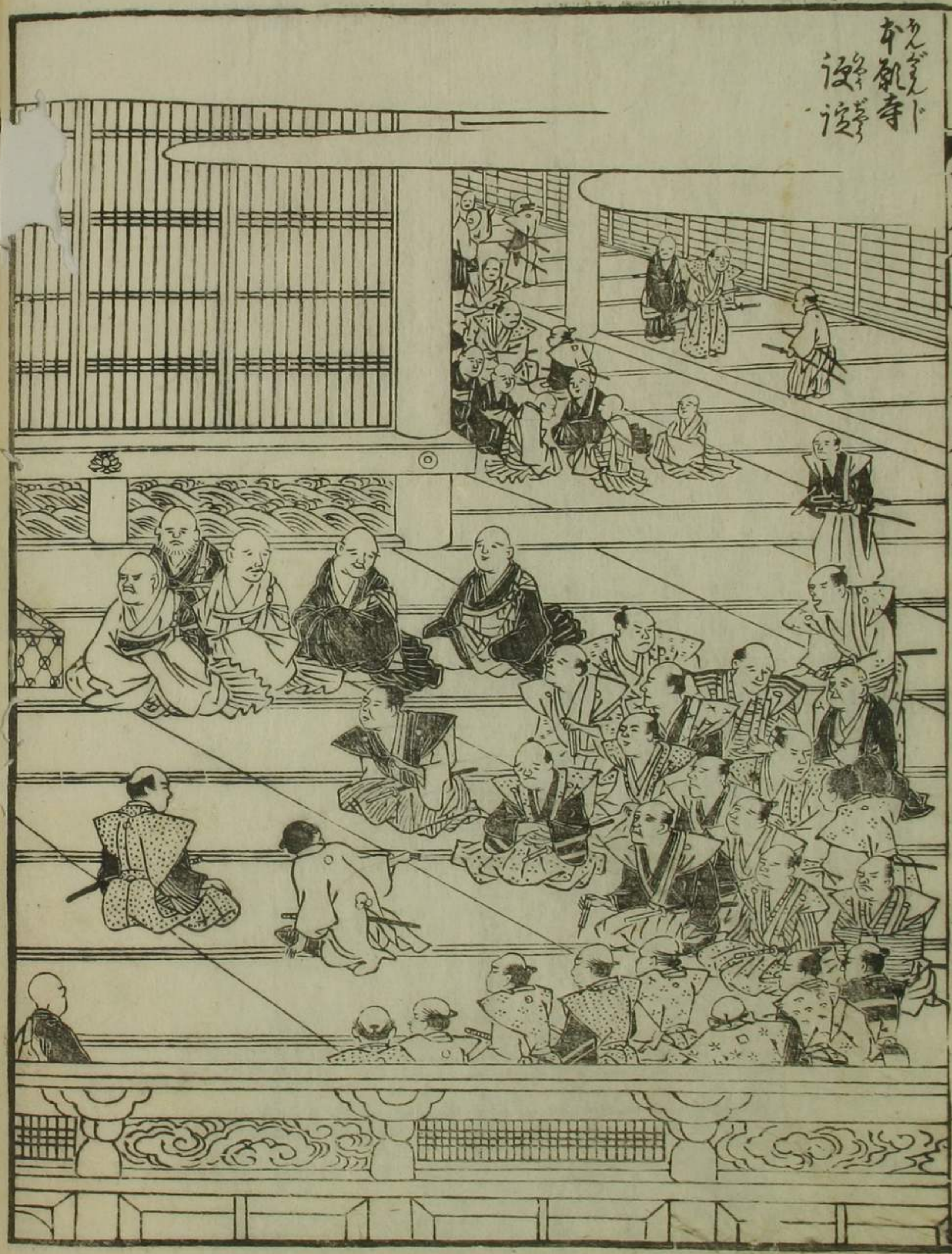


皆一日よど門と後物一法大慈悲の御門を(難攻を中)のけのくを
 御若勞うけなる信長の悪と嘯付ても飽きりて(難攻)信長は
 よせはとも門後の面く一黨し系都(運送)佛敵の又先よ命
 を落さば(佛敵)得達(縁)の縁なるべしいざ討く登らんといひし
 後よ寺中(大)きよ強きまよとくしりけり(一)層の坊友
 老席とまよ百性(を)を所めやうくよ(難)せめくれ(が)工人(珍)本
 源(右)勝門と進くるよ先よりの(後)論(終)くとして(一)交(せ)た(難)り
 足下の(高)論とげん(珍)本(を)率(謹)ぶ(や)る(ら)る(ま)よ(に)け(度)の
 一(幸)こそ(當)宗(小)門(の)真(度)より(ま)り(某)信(考)る(小)信(長)が(不)予(り
 降(退)し(終)入(附)の(深)怒(り)軍(勢)を(差)向(け)合(戦)よ(及)ん(こと)是
 必(く)信(定)ま(り)又(こ)人(と)下(退)ま(り)く(當)石(と)信(長)よ(り)て

終(り)し(も)是(れ)又(合)戦(よ)及(ぶ)に(其)故(は)信(長)が(難)寺(と)悪(く)攻(め
 ん(と)あ(り)細(三)ツ(あり)り(小)回(朝)倉(の)面(家)の(向)き(恨)ま(り)て(教
 多(合)戦(よ)及(ぶ)り(終)入(附)寺(朝)倉(と)因(と)信(長)が(難)寺(と)悪(く)攻(め
 の(免)り(あり)是(れ)信(長)が(悪)む(二)ツ(之)小(回)朝(倉)因(致)よ(及)ぶ(附)加(加)の(門)後
 多(朝)倉(よ)カ(と)助(け)小(回)方(先)が(あ)る(及)ま(せ)し(率)少(く)は(先)信(長
 が(悪)む(二)ツ(之)信(長)生(得)其(雄)は(して)強(き)を(悪)く(嘆)ろ(を)忌(む)威
 勢(の)者(と)妬(む)後(よ)き(と)凌(ぐ)け(放)よ(當)宗(小)門(の)に(海)よ(終)り
 日(く)夜(く)又(繁)榮(する)信(長)又(密)よ(是)と(妬)り(其)上(加)州(の)門
 系(勢)強(く)當(附)小(回)七(州)其(中)に(難)寺(の)飲(と)ぬ(り)是(れ)信
 長(が)當(寺)と(悪)く(三)ら(り)乃(第)三(なり)ま(よ)し(門)く(疾)本(難)寺(へ
 軍(勢)と(引)て(向)ふ(る)志(あり)と(あ)る(も)い(ま)は(勢)い(を)得(る)が(故)よ



本
願
寺
後
院



一國と物志所乃龍乃池中をわさるるがごとしけ時又係じて本教寺
 を切崩し日頃の勢懐と敷せんと欲とれども人の後論せざるを
 忍びて叶い難き不中とやうけ降退せば由り押寄せ美濃を
 若退敷らるる其体ゆたを討果さん信長が心算其ごとく公見
 罷り出さるる危より角より逃れられた合戦とてとる人の苗石山
 の要害を歎をうけけ法敵を遣し降入せし御退きの体ゆた
 御久々にねおと河をく渡さるる人々其外七里粟津が岨小躍りして勇
 熱地として居居ふと中間一家其外七里粟津が岨小躍りして勇
 五輪本氏の軍勢的苗の所論けとの降退めさるるに急ぎ信長
 不承知の過信し近國遠國の門後と集め合戦の用意とせし

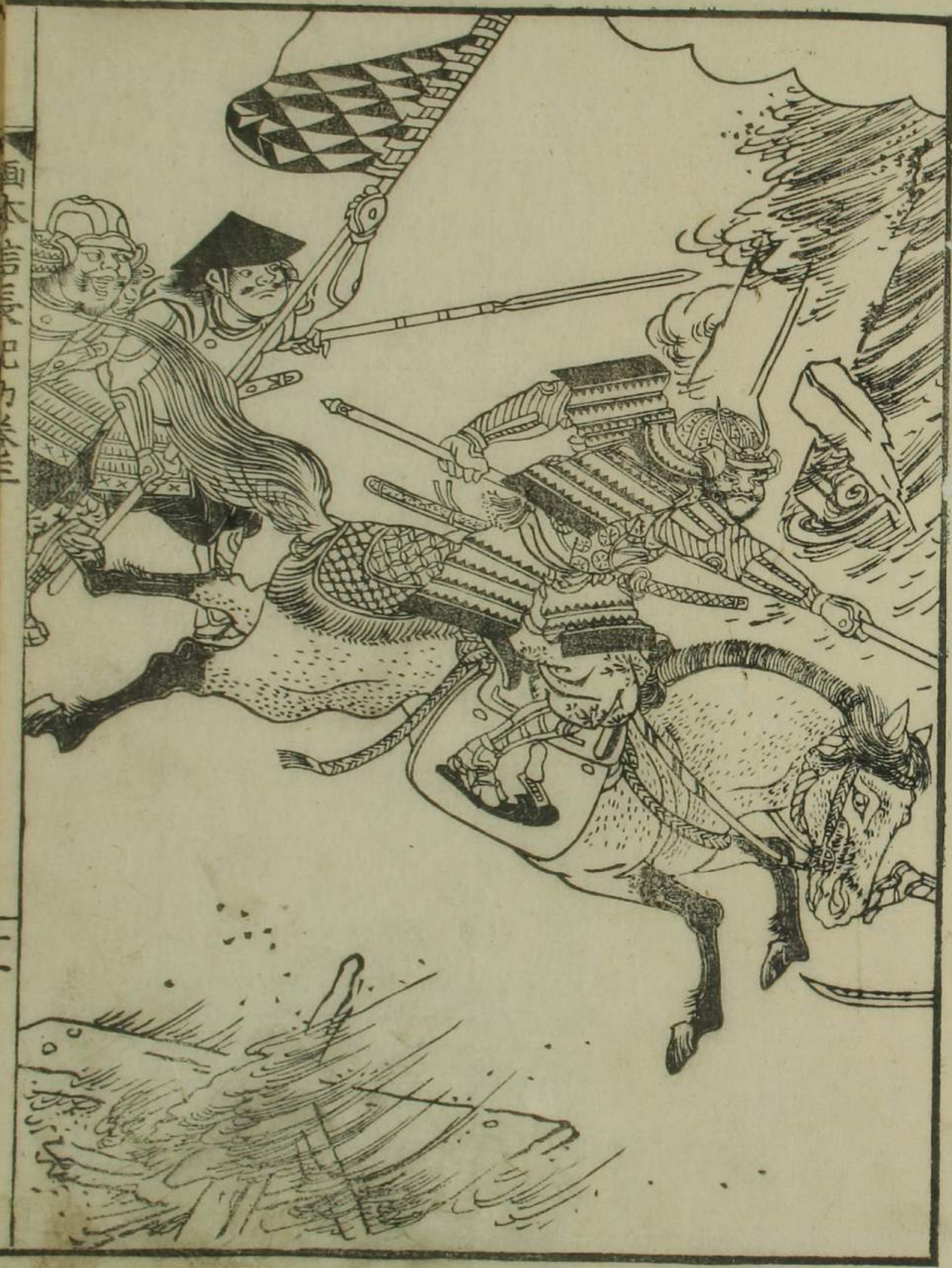
りきつる兵争を是と推志門より人苗時降退の強き返答は
 終つても信長急よ押よさるるのみならず比を成り三好の一黨に
 困みひそまり怨敵いまだ滅せざれば摂津は荒本他回の強敵を
 丹波は波多押の一族ありいざは仇く本多餘黨降退勢も小
 苗ありそを朝倉と扱小糸武田をえじりし諸國の大敵を
 と何れもお集り乃時より小信長何のや成りつて余の劉敵
 をお控に極き本教寺へ美濃をさきたる信長一討の怒りも絶と
 志と軍勢と出さんとのふとも小田家元来諒略の居りま
 必以諒り止むべし先和ら小田返答してと人となじり御口
 の面く抗とるる西三奉の心算く体も終つて返答の口とるるとはど
 くも中合つと人となじりまを乞死修國へこそ降りたる取如と人そ外の

坊官家老り珍本末弟瓜見後「明智」移り無後家より一信「諸
方乃」門後多よりいとまを賜ひきて合戦より及びらば其時「龍城
頼むは」信後されり小門後多委細長り已ごまごり海りたり

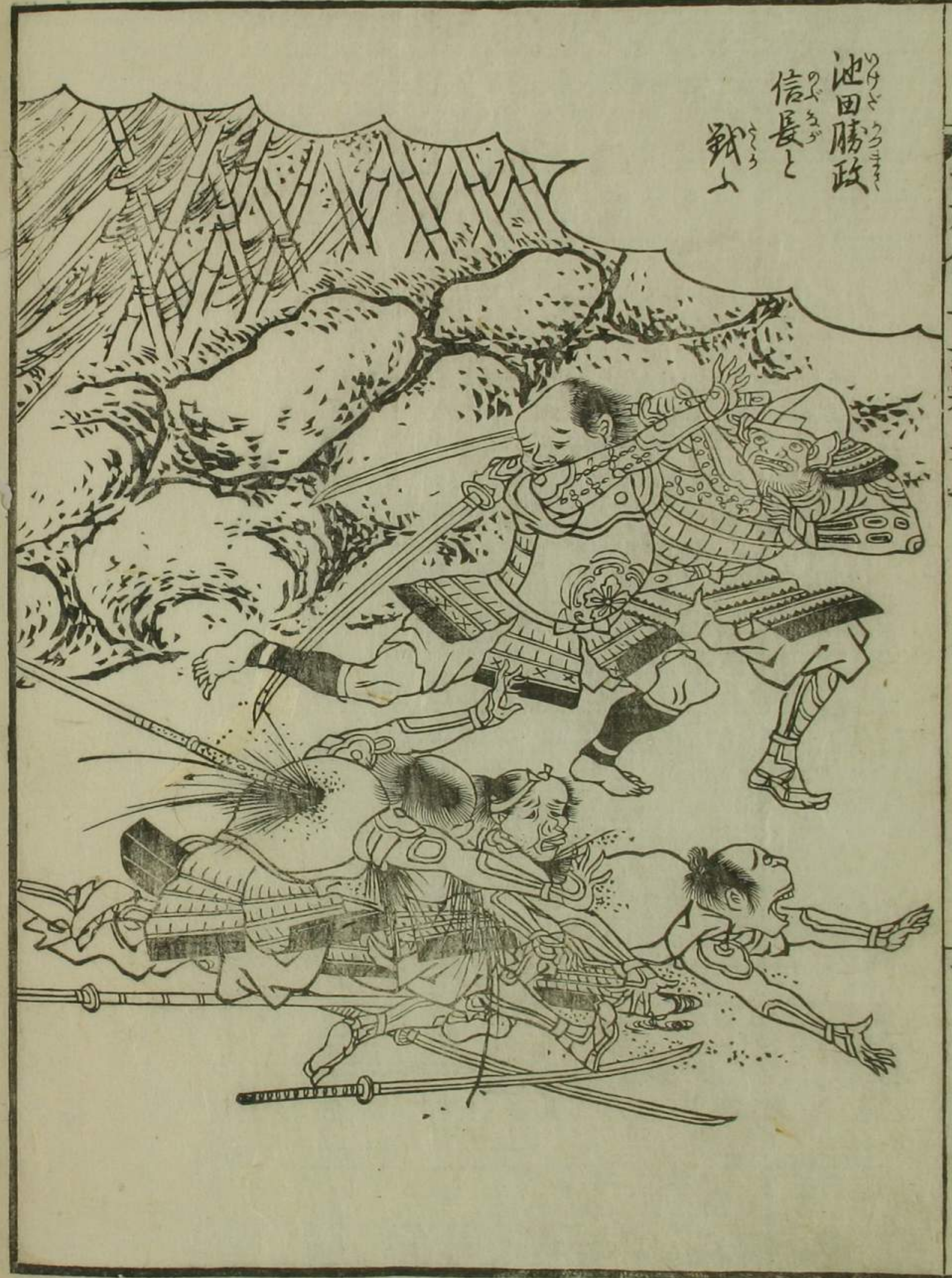
信長撰河内國平均之車

去りて小田と総女信長の東福寺より本陣ととりて諸方のはをき
りて戸知せりしころ小叢内の武士我りしころ糸止し名物名器と献
御上洛と賀し糸止り松永陣心久秀りしころ以りて三好黨と石和
如り信長の幕下に来りて陣多に在外系大津系良郷の町人等
殺し糸向し本陣乃門外市とふし濃は信長の威風を近は信
せり時より石山本教寺より後者到速して濃は中々信長
利為軍家再真のる河上洛ありせ給ひ懇款退討の候りし石山本

教寺の地は城郭と築き給ふをた守去地御不守の信長軍の御斗
ひたしるべき事御をよしくも我宗門は抄ひし中真蓮如上人登
徳を子の靈勅は依て用基ありし有縁の勝地にして先佐
ひをひて他邦へ移ししりし叶ひ難く嚴志忍入てし給ひけ御免
許とせ給り度いとの返答は信長とて守て大さ小怒り勝き長坊を
りかや糸うるたし人登徳を子再素しと建立せし寺へり信長が不
屋せんや何糸遠宵のめきや況や遠如したの草掘坊より思勝乃
道徳と祝し多子の靈應とせ給りしるごとく候り本陣を合り建立
本教寺より瓜信長が屋より應せ給退去をほしき糸糸怪を極ん
たやりのりて大軍とて是圍と火と放て焼立給し坊より看と
洗ふてお給りしと此の外の氣をうれば本教寺後者大さ小怒り

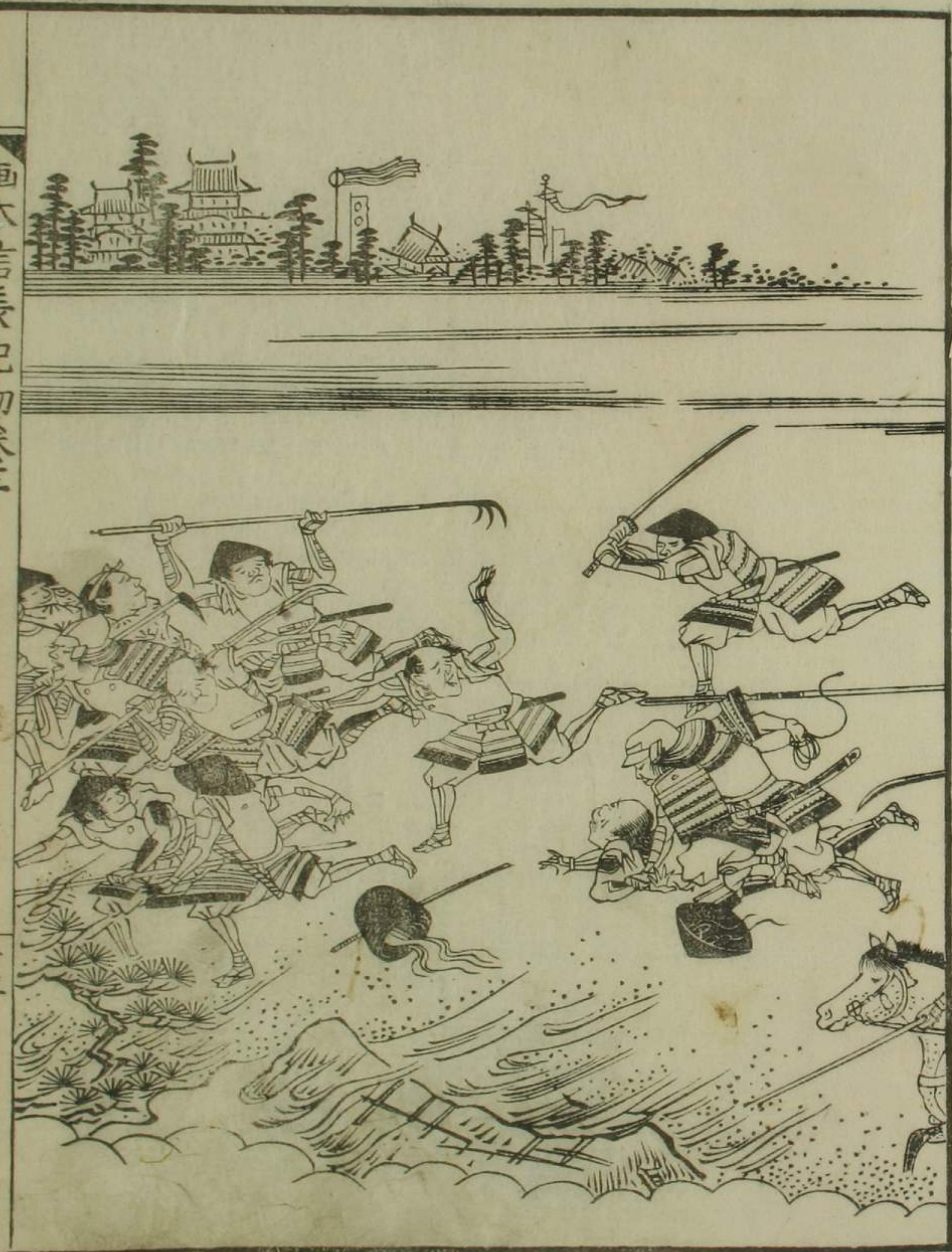


池田勝政
信長と
戦ふ



既を抱へ嵐のどく遊降るけ耐本下後吉郎秀吉信長の御前
 出陣めくヤクらの御振立御をよはふも出陣に方の敵徒いまで賊せ
 比君真業の美袖より坊主系とおむに兵と勅し終り人の詮るれり
 又いりたや其密は悪業のめぐるは又天下に覇業をふるんと欲さ
 者の先軍とぬれは如登りては密より耐の謀略も能く不徳威威
 も幼軍は軍令も正しく威威軍令謀略も三ツ幼りれどて敵
 を賊する者いまであはし今に海の内交乱は兵革止は故諸國
 の大名とぐくを困窮せり其中は只一人ある者あり之と惟さ
 忠石はや彼本教寺殿如り君志がく怒りと抑え本教寺と
 む川はく國より渠が令を流をひて小田家の軍用は宛天下
 と証し強敵と比し真業令き耐と幼く只一踏は本教寺を

いぎ漢人よ何の子細いべき先服茶津國河内の敵徒と結ぶ
 らよ京都予安ろく人御斗こそ肝要にいと候るゆへ言とと
 是は信長実よりとく其云系は法に本教寺と打とて是先
 岩成を税女が籠るる本龍寺の城を夷落し次は摂州武庫郡
 河内郡を放火し三好が姉族とも乃籠りたる城と退落し河内
 國よている屋敷森西城は三好が御用は又岩籠り居るる各防
 戦叶よはしとく城と捨てに國の方へ落ゆりけ耐新云方義
 略もも京都と出陣し終ひは森の津津を居られり又男山の方
 よりも越後多とび来りて旗のとりえり是是利家の右側
 かりとく御軍陣に信感はしく終りも山崎と御陣ととる終り
 信長の八万余騎の大軍と引陣し池田の城も池田籠後守勝政と

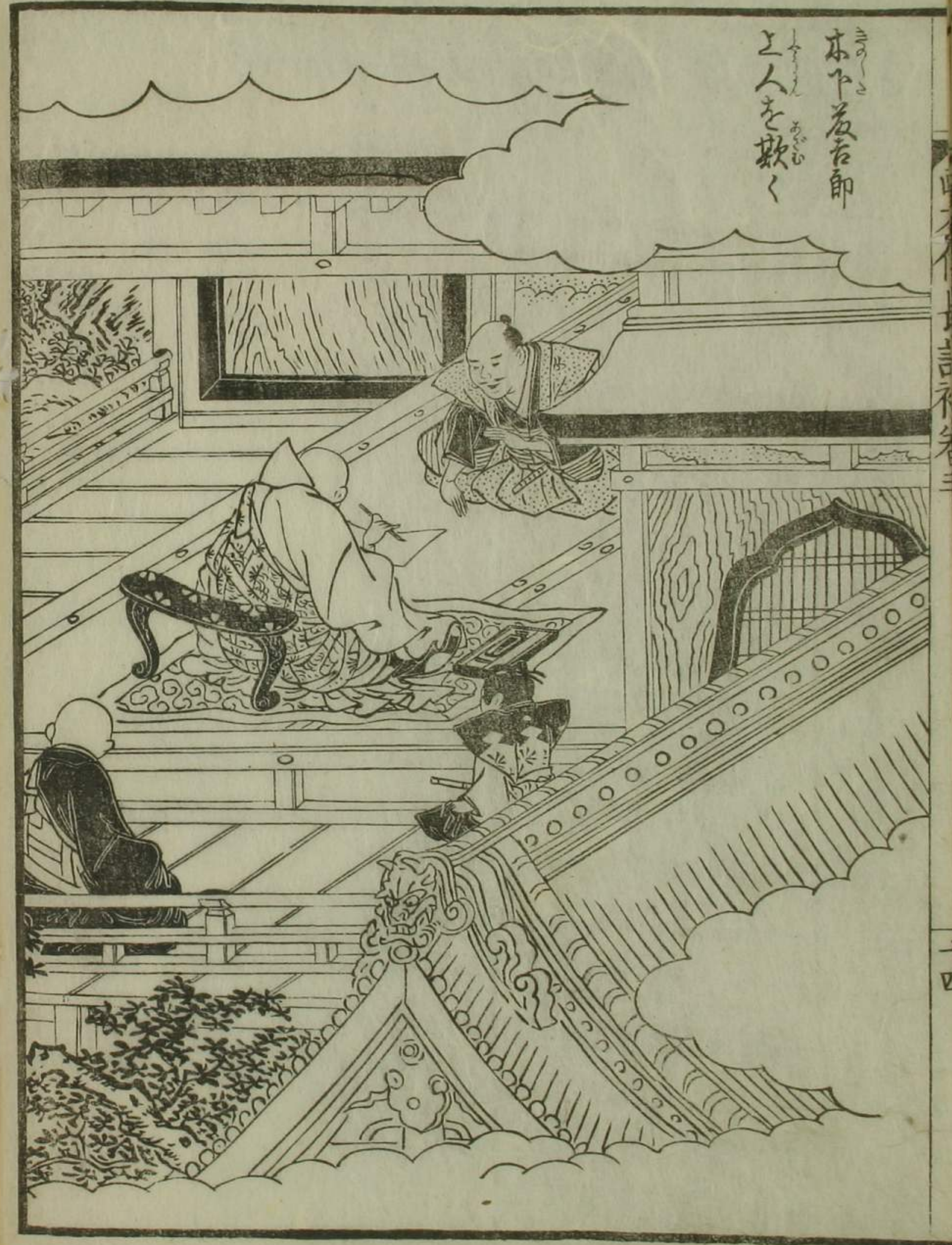
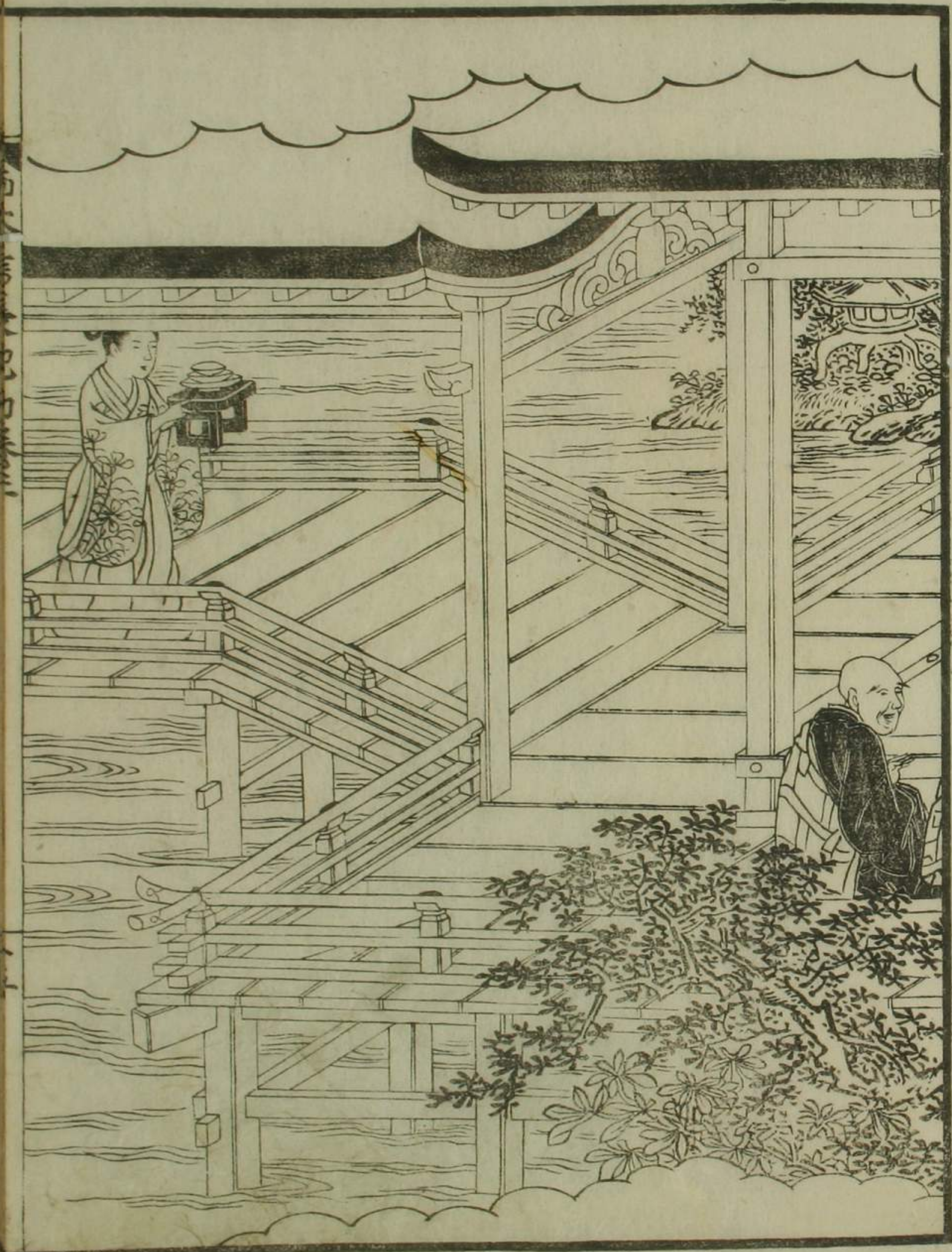


妻らうけ勝政大別かつまさの者ものて外曲論そとまがひへ切きて出信長いしながが旗はた大振おほ掘川平ほりがわひら
 左邊門ひだりべを討うた勇ゆうと震おどふて戦いくさへども小田勢おだせう大軍おほいなりし事ことも
 せむ終つひ三さんの丸まるまで妻破せむやぶらまは人質にんぢとゆいく降参くだりまは外日そとひ國くに
 二押ふしひくる柳やなぎの城しろ茨本いばの城しろ友川ともがわ乃すなは城しろ小住こぢあゝの城しろとてめとじ
 津國つ一國いつくにの郡村ぐんそんとて信長いしなが又また破やぶれ軍いと守まもりて京都きよとよ
 降陣くだりつうけ同僚おんなごう又また二十にじゅう余あまりケ百ひゃく方かたり城しろ又また小田家おだけの武威ぶゐを近きんよ
 ろうひ世よきだといふ者ものはし是こゝより信長いしながと後あうご又また後ご下げ陣じん思し
 補かせられ新あらたね軍いより二ふたツ列り柄やの旗はた又また威い状じやうを添そへし揚たげ
 信長いしなが面目めんめくを融とけ又また畿内きないの仕し盡じんとも中な後ご本國ほんこく寺てらとね軍いのり
 所ところ不ふし志し門かどらひ本ほん下げ後ご若わか郎らうと京都きよと乃すなは目代めだい又また妙たえ諸しよの
 斗は略りやく本ほん教きやう寺てらの兵へい斗たうひ文ぶんと中な合あらひ信長いしながの永えい福ふく十じゅう年ねん十じゅう

月廿八日京都を去り濃州なごう岐阜ぎふ又また改か城しろあり

本下ほんげ秀ひで右みぎ軍い用よう金かね借か本ほん教きやう寺てら事こと

去さ後ご石山いしやま本ほん教きやう寺てらは信長いしながが怒いかり甚ししく今いまりや軍兵いんべい勢せうひ
 素もとからんと工人こうじんともめ上下じやうげの役やく人心にんしんも更さら又また心こゝろを
 門かど後ごと集あり弓ゆみ又また経つるとてけ矢やの根ねを磨こぎ又また鉄てつ炮ぱうの符ふととら
 櫓やぐらとて丸まる竹たけ本ほんを結ゆひ合あ戦せんの勇ゆう意いとてりぐと持もち小こ信長いしなが雷らい霆てい
 の鳴なりるごとく摂州せつしゆ一國いつくにと二十にじゅう日ひの間まに本ほん均じんし本ほん教きやう寺てらへ
 本國ほんこく兵べい糧りやうへ降陣くだりつうけ本ほん教きやう寺てらの軍用いんようつうけ又またあり
 又またあり心こゝろ地ちなりき是こゝよりしては鈴木すずきを妻よめが明智あきら光ひかり雲ぐもの遠とほく
 威い福ふくしいよく敵たてひるむる時ときは同どう年ねん十二じふに月げつ朔しよく日本にっぽん教きやう寺てら乃すなは大
 至き國くによ来きりて案内あんないせる侍さむらいあり其その面おもて後ごのどく眼まなこ尖とくしてあ
 の長なが



い又尺二満と顔籠るれども威風又易者なりは三十余人の積まり
 を門前に待せ執次とひてヤツるい京都の守備代本下辰吉郎秀吉
 自ら信長代系として今日後若く社系にしそ序とひて推系はる
 上人拜偈と境し終り本寺よりと懇勸にお通るう元次の若心移る
 き板の歩及びる後冠者とはけ男のうらんや何やをうや来り
 いろり強勸を引出れ申しんと肩とをらめく上人へまうくと云こと
 を於て大廣間へ遣し入上人ま物と對面られは秀吉恭く礼と初い
 滋又先よりは信長出御本寺と本寺及びゆぬ御釋退の執き御宗
 向は初いぐむの御宗信長逆一は承知しては初はけは後信長心を
 又初いぐむも隔意とせしとむるは「上人は又御宗より信
 長が御宗よりうべき系某とひて是系に入いと濃で濃うううと人
 長が御宗よりうべき系某とひて是系に入いと濃で濃うううと人

き小教び終ひこの改りうる後を始りいりうる信長別心せざらふ
 法障の身としていうそり宿志のゆきき出寺は信長の威風を
 犯し怒り又獨りゆのそと恐怖しそゆいしよ今の後とゆきけこの安
 堵やいとく御宗の余り上人出意うりて秀吉酒ととくゆ海
 の滋味肴積席は濃く御酒宴と催し終り何とぐる連交よとく近
 習小姓とりぐり夢中しく僧馬樂と唄ふ者あり後系の親と系
 つて是の御宗へし令之と御宗またまうは遊るりあり何と真ら
 りゆり短き日又西又傾けいるを乞て益を抄さ再び上人及中
 々の今度義略と上洛まうく新にお軍威と嗣終へども御宗不
 と人せざらふ小に方の懇款とびざれば軍兵と扶持「糧米と系と
 修（日毎の軍用糧）くあつる不如意に何とせ終り信長海く是と

新 秋 本

新 秋 本
新 秋 本
新 秋 本



画本信長言初卷三

十六

是ふちとて自ら乃合戦又軍用是くは結けりて斗略を多しぬ人
 足利家再真乃後を扱せしめされ一臂の力と掛け用金と助勢あり
 本軍とにちあしせ信長がまひ何りも是も妙なる事今日の推業
 實にけきとやせんおん御兼知のりも難ういしと政を下て言こは
 工人委細令兼ありて本寺退去の事こそ裁度し降退りせ我
 力の及びんやどは助カヤせしとて銅錢二万貫別乗者と兵次と
 款とあり終より退く上納とすべきはしほへ終へは事吾感涙を流し
 候て銅錢と人ま教多し祈らせ工人又慈と謝し京都へそよりり

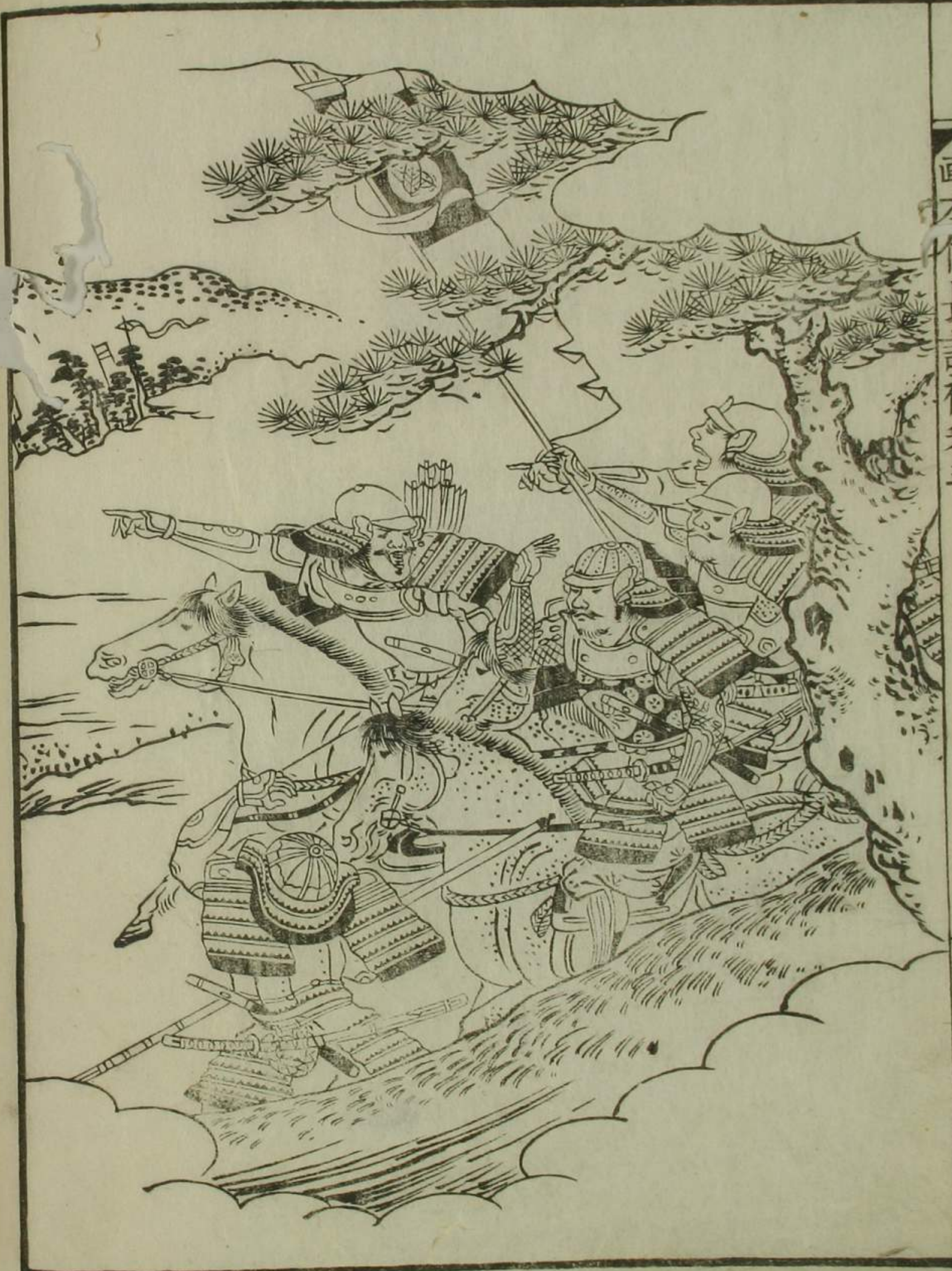
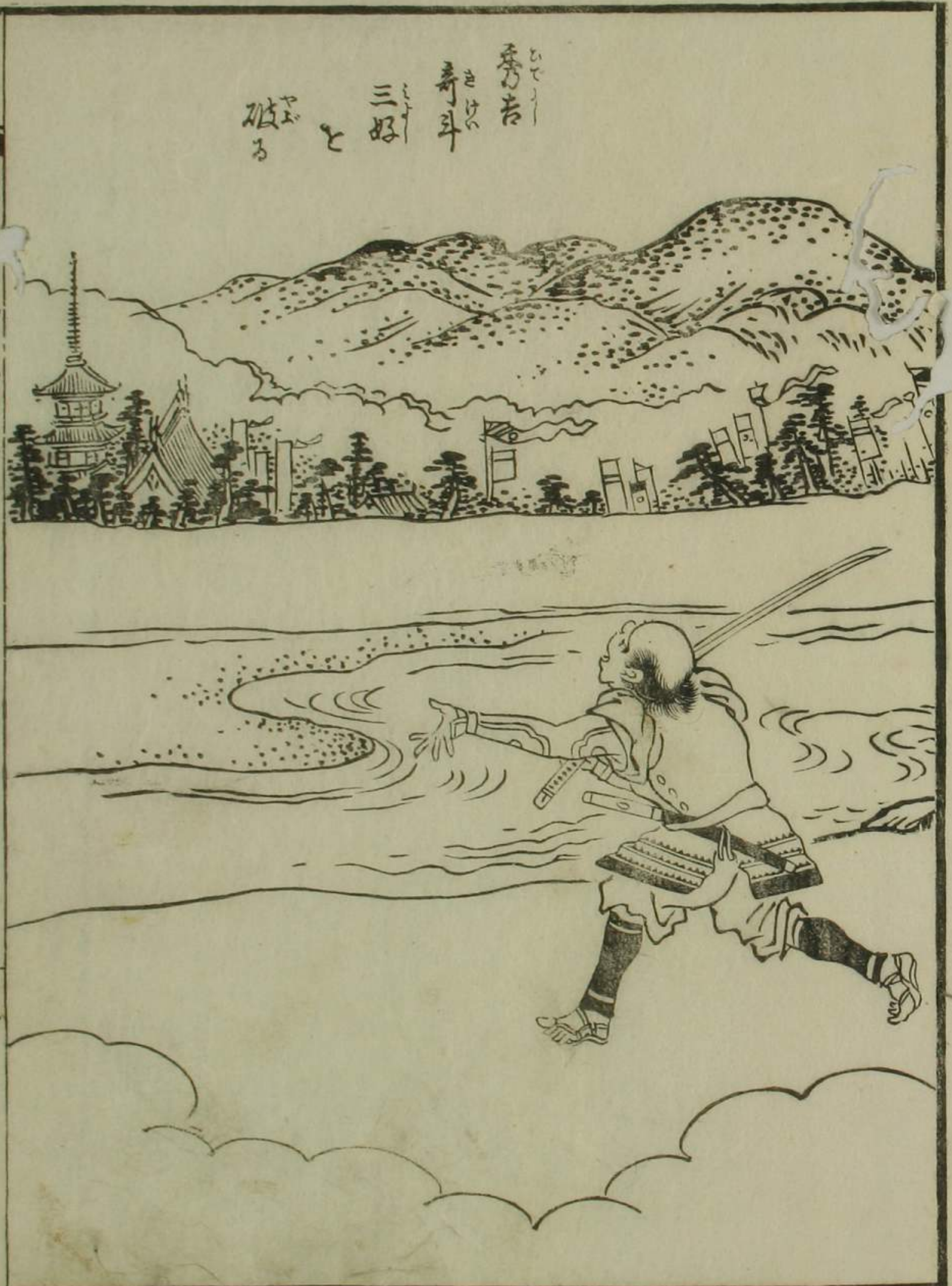
本國寺合戦之事

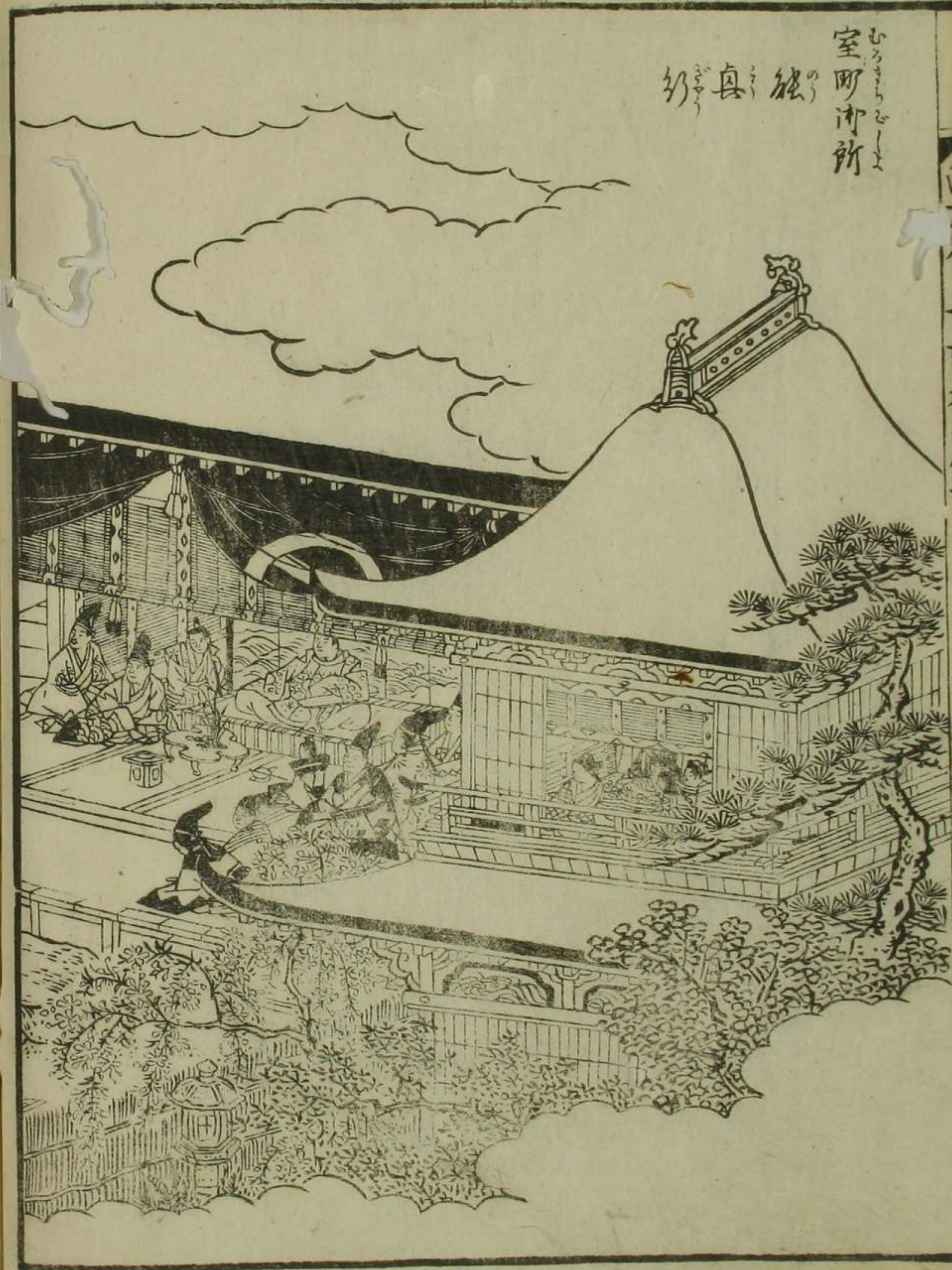
如工人の信長が怒り解くと款は終ひ且足利家再真の助け
 事とて泉州堺の津後宮の門後を御教ありて若子の令根本教

度く上納はしつたれば家老下回教廉休めりて信長の表裏
 定めぬ若人なればいりり斗略を心中と扱人も知はるるは用金上
 納の事と一應の代りくはしめり候教指しとてい尚寺の園務
 にもおぬり且門後多しおねの祈り先紀州及白山へ候とて
 らは珍本を幸と渡せりて渠が中条も御守り候とてと云上
 とれは工人宣ふ中うり我の只世の人乃是ふ事と取らんは信長心
 又不信と扱は彼が事とて執るるは我身は何の思ひもあんは
 候も汝が言と理りありて後者をんて事あるに易同せりり事幸
 候者の口と逐一は終り候と扱て大き小笑ひ是は本下及者即身
 勝ん彼後面即上人の佛種優長なる長袖を欺き本軍家再真
 と唱し本教寺の令後と借り密に信長が軍用と記諸國の

敵後を退治し己が勢ひ強大なる時不意に起つて本教寺と妻
 人と此是兵書と不謂敵なる所借く敵を滅亡謀之は所つて
 上人よりきいけ後用令調達河五用より也且後兵糧軍器乃
 用之めく信長が不意に妻うけいと河邊少とやさう也後發
 き急ぎ石山より歸りまうくと申上人の信はすい疑ひた
 まへも先を率かまふ系又防ひ是より用令と納をとら給へ明
 を承祿十二年正月二日に國の三好輝起を滅し堰の津と勢採
 し河内國を経て京都六条本國寺彰お軍の母也また飯の所へ
 押させさんぐよこそ妻よりくる本下後右即妻右是とすし信く
 紙旗殺百流と造りさまぐの紋相布を画せ七条九条より竹田
 街道の村よりちちち百姓小令じて寺院のち被せ藩を需め出

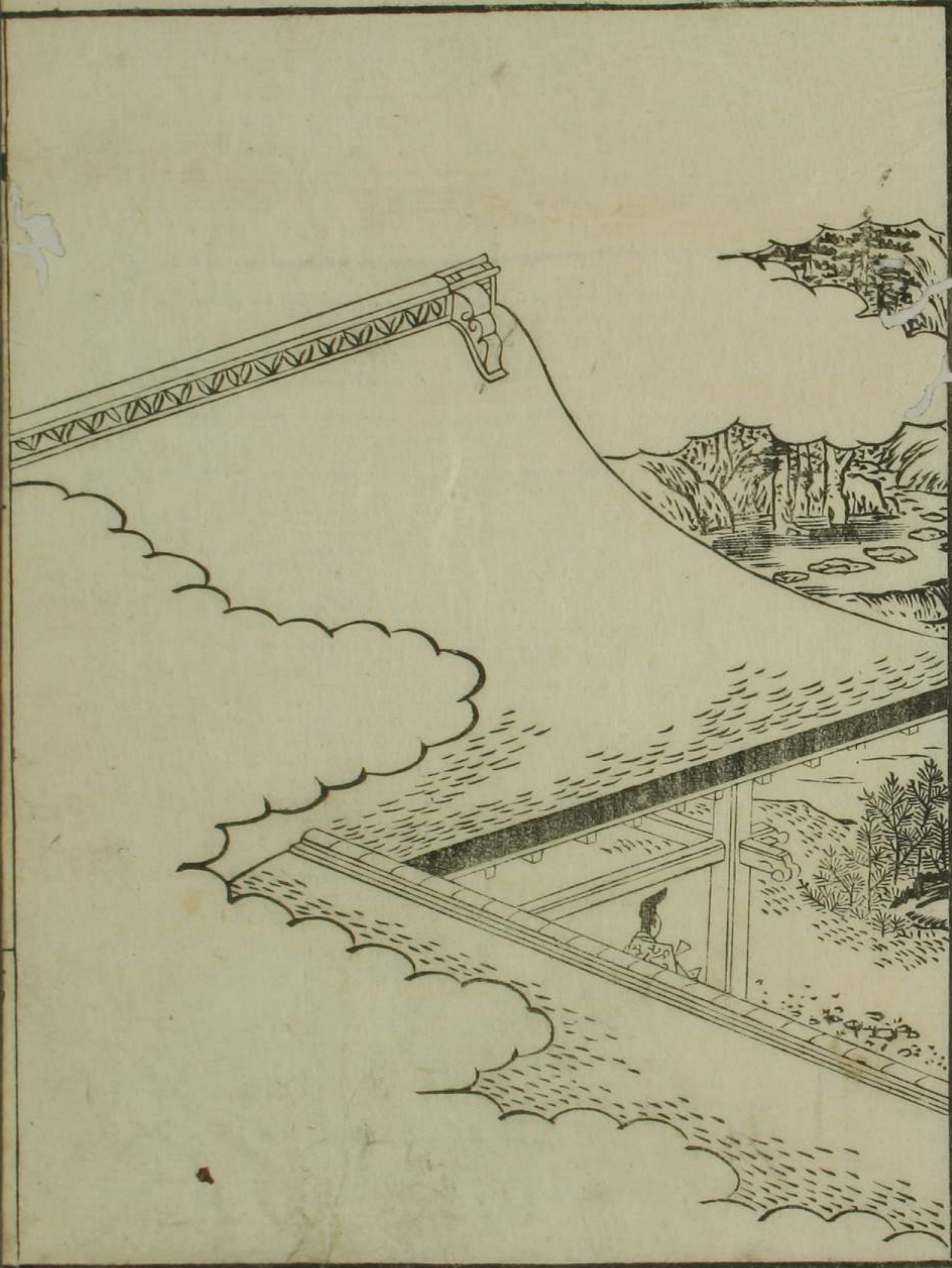
町きましく本國寺へ入加勢のさまと如くする程は三好勢俄より進
 る得ば時刻と移し於河内國若江の城より三好義次津乃國
 丹の兵庫隊親貞池田は後守勝政とにむし近國乃大石お
 軍家の加勢としく追く馳来りて國の三好と粉のどくお崩し首を
 斬り八百余級終は三好勢上方より得ば河内國へ逃去り信
 長は河内國の城より退しうらけけ河をたに發き飛馬と鞭打京都へ
 馳よりる小とや三好勢敵じくお軍はは何の意もはしまは信長
 系向して退敵の快びと怒しくお寺院の要害なるまゝおのちま
 たこそ凶徒多龍名ひきれとく二条勘解由小治武衛陣の焼つとみ
 石垣と築上げお軍の河内國邊宮とこそはむらとくるお信長京
 の堰へと後とまらるる官官老の若ともは信長はとてお軍家河上





室町所
の
徳
真
切

室町所
の
徳
真
切



初の終る日河尻俊の徳貞外より信長出仕ありて久國乃河
 右刀と献とある軍制より此飲ひ終ひ自ら河尻を去せ終ひ信
 長又酒と揚入実よ小田家の面目よりと人々これと云う中より日
 又月十一日信長河尻とま中上本國岐阜へ帰城せらる

繪本拾遺信長記初篇卷之三終

